

きっかけ

問題： 下のような内容のメールを英語で書いてください。

宛先：大学の先生(アメリカ人) 内容：個人面接の約束を取り付ける

さあ、あなたならどう書きますか？私が初めて「語用論」という分野を知ったのは、実際にそんな機会があった時でした。当時英語専攻だったにもかかわらず、「英語で丁寧な頼む」方法がわからない。日本語だと敬語もあるし、「お忙しいところ大変恐縮ですが」のような表現も使えます。でも英語では？結局すごく時間をかけてとても短いメールを書いたのですが、なぜこれくらいのもできないの?!とすっかり自信をなくしました。と同時に、それまでに英語の丁寧表現をほとんど習ったことがないことに気付きました。ちょうどその頃、言語学の授業で、当時研究が始まったばかりの「語用論」という分野を知り、非常に興味をひかれました。

魅力

では、その語用論とは何でしょうか？言葉を使うとき、私たちは文法や語彙や発音の知識(言語知識)だけでなく、その言語社会のルールやマナー、決まっ

た言い回しなどの知識、つまり「語用論的知識」も使っています。例えば日本語だと「目上の人には敬語で話す」というのもその一つです。これらのルール等は言語や社会によって違うことが分かっています。例えば、アメリカ英語では「目上」だからではなく、むしろお互いの「心的距離」によって丁寧表現の使われ方が変わると言われています。つまり、きちんとした言語コミュニケーションのためには、言語知識と語用論的知識の両方が必要なのです。

私は特に外国語学習者の語用論的能力とその習得に興味を持っています。というのも、それが本当の意味での外国語の習得には不可欠なのにもかかわらず、文法や語彙を学ぶことによってでは身に付かないからです。ところが、これまでの外国語教育は言語知識の指導に偏り、語用論的能力に関してはほとんど触れてきませんでした。私はこの問題点の改善を目指して研究をしています。

分野の将来性・発展性

皆さんの中にも「社会で使える英語」を大学での英語学習の最終目標にしている方が多くいることでしょう。その実現のためには、文法の知識や発音の正確さなどの習得はもちろん、それを使いこなすための語用論的知識が不可欠です。社会のグローバル化に対応し、語用論研究を活用した英語教材や教授法への需要はこれからも高まると考えています。

■英語

■メディア英語に見るアメリカ社会と文化 | Ⅱ

阿久津 由佳

(あくつ ゆか)



上智大学外国語学部英語学科卒業後、シティバンク・群馬県庁に勤務。その後スタンフォード大学大学院で外国語教育を専攻し修士号を取得。趣味は映画観賞、旅行。これまでに訪れた国は約30カ国。